第12回「掛川考古展」

「掛川の古墳」

とき　平成29年12月16日(土)～12月24日(日)
午前9時～午後5時 ※21日(木)は午後7時まで

ところ　掛川市立大東図書館 1階 生涯学習ホール

掛川市教育委員会 社会教育課

古墳とは

前方後円墳の出現

奈良県桜井市の三輪山を望む平地に全長278mの前方後円墳、箸墓古墳があります。3世紀中頃（約1,750年前）につくられたと考えられ、一説には、邪馬台国の女王卑弥呼の墓ともいわれています。箸墓古墳以降の前方後円墳には、形や内容に共通性がみられます。前方後円墳は、北は宮城県、南は鹿児島県まで全国でつくられました。箸墓古墳は、全国に定型化して分布する最初の前方後円墳と考えられています。

古墳とは

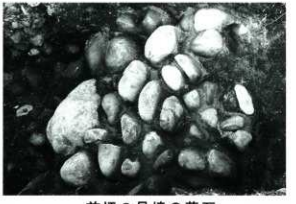
定型化した前方後円墳の出現から中央集権国家が確立した奈良時代までの約400年間を古墳時代とし、その時期につくられた墳墓を古墳と呼んでいます。前方後円墳のほか、丸い平面形の円墳、四角い方墳など、さまざまな形の古墳がつくられました。

また、古墳時代につくられた墓は古墳だけではなく、墳丘を持たない土壙墓、山の斜面に穴を掘り墓室とする横穴もつくられました。これらの墓は、大型の前方後円墳を頂点として、その大きさと形により、古墳時代の社会の構造を示していると考えられます。古墳の大きさが同じでも、形を比べ、前方後円墳と円墳では、前方後円墳に葬られた人物の方が位が高いという考え方です。

掛川に古墳がつくられる（４世紀後半）

市内最古の前方後円墳

逆川の南側、高御所の丘陵上にある前坪古墳群３号墳は、４世紀後半～末頃につくられた市内最古の前方後円墳です。全長は47mをはかります。墳丘斜面には崩落防止と見栄えを良くする葺石が施されています。また、壺形土器が出土しており、墳丘に立て並べられていたことが考えられます。埋葬施設は未調査のため不明です。



前坪３号墳の葺石

４世紀代の古墳

下土方の丘陵上には、確認調査で発見された谷田古墳があります。周囲の地形は削られており、古墳の形や大きさはわかりません。埋葬施設は、丸太を半分に割り、内側をくりぬいた割竹形木棺と考えられます。

木棺の下には砂利と拳大の河原石が敷きつめられていました。石の上には真っ赤な顔料が残り、腕輪の形の石製品である石釧が出土しました。これは、市内唯

一の発見です。

原野谷川に面した吉岡の台地の縁には、直径30mの円墳である春林院古墳があります。二段築成の墳丘斜面には葺石が施されており、壺形土器が出土しています。つくられた時期は、最近の研究では4世紀後葉～末ではないかといわれています。さらに、高田の台地の縁にある全長 63mの前方後円墳である瓢塚古墳は4世紀末につくられたと考えられます。墳丘斜面には葺石が施されています。また、青銅鏡2面と壺形埴輪が出土しています。この後ふれる和田岡古墳群の形成は、この2基から始まります。

谷田古墳の石釧

現在、市内で4世紀代につくられたと考えられる古墳はこの4基だけです。4世紀代の古墳の数は少なく、古墳をつくることができる人が少なかったと考えられます。

瓢塚古墳の壺形埴輪

春林院古墳全景

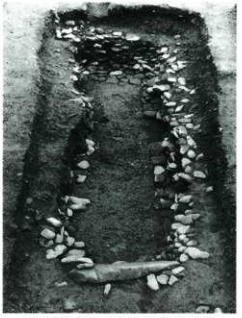
ひろがる古墳の分布（5世紀）

和田岡古墳群の大型の古墳

和田岡古墳群は、和田岡原と呼ばれる原野谷川が形成した河岸段丘上の南北約2.5 km、東西約1 kmの範囲に点在する古墳群です。そのうち、原野谷川中流域を治めた豪族の墓と考えられる、大型の前方後円墳4基（各和金塚古墳、瓢塚古墳、吉岡大塚古墳、行人塚古墳）と円墳1基（春林院古墳）が国の史跡に指定されています。

5世紀前葉には、全長66.4mの各和金塚古墳がつくられます。後円部は二段築

成で、斜面には葺石が施され、墳丘には円筒埴輪が立て並べられています。埋葬施設は最も上等な竪穴式石室で、残念なことに盗掘にあってしまいましたが、大刀17本以上、剣35本以上など鉄製品が多く残されていました。そして、5世紀中ごろに全長55mの吉岡大塚古墳がつくられます。後円部に対して前方部が短く、その姿から帆立貝形古墳と呼ばれる珍しい形の古墳です。後円部は二段築成で、円筒埴輪が立て並べられています。墳丘斜面には葺石が施されています。墳丘の周囲は、熱気球型の周溝がめぐっています。埋葬施設は不明ですが、墳頂部で地中レーダー探査を行ったところ、何らかの施設があることが予想される反応がありました。


各和金塚古墳の竪穴式石室

吉岡大塚古墳は平成29年度からいよいよ整備工事に着手しました。完成までに数年かかりますが、古墳を保存しながら、一部には葺き石を復元、円筒埴輪も立て並べ、つくられた当時の様子もわかるような整備をしていきます。

吉岡大塚古墳全景

そして、4つめの前方後円墳である行人塚古墳は、全長42mで周溝に囲まれていることはわかっていますが、埋葬施設も未調査であり、つくられた時期がはっきりしていません。

土壙墓の存在

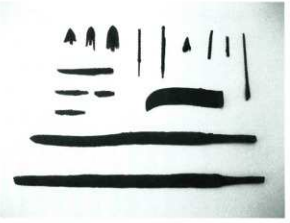
土壙墓は、墳丘を持たず、死者を葬る墓穴だけのものです。吉岡の今坂遺跡から発見された土壙墓は、副葬品は鉄剣1本が残されていただけですが、土壙は長さ4.7mという、大型古墳の埋葬施設に負けないくらい大きなものです。

高田の高田遺跡では、特徴的な鉄製品を副葬した土壙墓が発見されています。ヘビがはうように曲がった蛇行剣と祭祀具とも考えられる鉄鐸といった珍しいものです。

今坂遺跡の大型土壙墓

鉄鐸は、鉄生産に関わる祭祀具ともいわれます。出土した鉄製品には工具も含まれることから、和田岡の豪族の元で、鉄製品の製作や木工に携わっていた職人の長の墓である可能性も考えられます。

これら様々な墓により和田岡古墳群は構成されています。古墳時代のこの地域の社会の構造を反映していると考えられます。



高田遺跡の鉄製品

和田岡古墳群と逆川沿いの古墳群

長谷と高御所の境の尾根上にある浅間神社古墳群３号墳は、直径 40m の市内最大の円墳です。墳丘には円筒埴輪が立て並べられ、副葬品として豊富な種類の鉄製品を持っています。５世紀初頭～前半につくられたと考えられ、４世紀代の前方後円墳、前坪３号墳に続く古墳といわれています。浅間神社３号墳は大型であり、豪族の墓であると考えられます。

岡津原出土の青銅鏡

原野谷川の東、岡津原と呼ばれる台地の縁辺には、直径 15～20m 程度の円墳が３基ありました。規模は決して大きいものではありませんが、副葬品として青銅鏡を持っていることは注目されます。青銅鏡は王権の証である「三種の神器（剣・玉・鏡）」のうちの一つであり、権威の象徴といえます。

原野谷川及び逆川流域を舞台に、豪族同士がどのような関係にあったのか興味深いところです。

五塚山古墳

掛川市立大東図書館の東、川久保と大坂の境であり、眼下に菊川流域を一望できる丘陵尾根には直径 22m の五塚山古墳があります。埋葬施設は３つあり、そのうち最も大きいものは棺のまわりを河原石で覆った礫槨という上等なものでした。ここから、有蓋台付四連坏、台付三連甕と呼ばれる複数の器が接合され脚が付く副葬品専用と考えられる珍しい須恵器や青銅鏡、耳飾りの一部と思

五塚山古墳全景

われる金製の金具、鉄剣、鉄矛などが発見されています。大きさが 20mを超え、副葬品も豪華なことから、菊川下流域を治めた豪族の墓であると考えられます。つくられた時期は5世紀末と考えられています。

群集する古墳（5世紀末～6世紀）

古墳をつくる階層のひろがり

五塚山古墳がつくられたころから、小規模で副葬品が少ない古墳が多くつくられるようになり、群れを成すように存在していることから群集墳と呼ばれます。

上屋敷と和光にまたがって存在した不動ケ谷古墳群では、狭い尾根上に連なるようにつくられた、5～12mの大きさの円墳7基が調査されています。土壙に直接木棺を収めたことが考えられる埋葬施設から、鉄鏃、鉄斧、装身具である管玉などが発見されましたが、その数は大型古墳と比べると大変少ないものです。

これら群集墳が形成されたことは、小規模ながらも古墳をつくることができる階層の人が増えたことが考えられます。

横穴墓の登場

4世紀後半、大陸から九州に横穴式石室が伝えられました。それまで、日本の墓は縦に穴を掘る形のものだけでした。横穴の墓は、ふたを外せば再び葬る（追葬）ことができます。横穴式石室は、その後、九州から東に伝えられ、6世紀になると日本各地にひろがりました。さらに、横に埋葬する部屋をつくる考え方から、丘陵斜面に横に穴を掘り墓室とする横穴が、九州で誕生しました。掛川市では6世紀前半につくられ始めました。市内では横穴式石室よりも横穴が先行して導入されました。

現在、最古とされる横穴は、長谷にあった向山横穴群1号墓です。特徴として墓穴の入口の床面に幅約10㎝の溝が掘られていることです。そこに木の板をはめ込み入口を塞いだことが考えられます。その後の横穴は、入口に石を積んで塞ぐようになります。横穴の導入時を物語る貴重な存在です。

宇洞ヶ谷横穴の大刀の飾り

豪華な副葬品を持つ横穴

現在の掛川市役所の敷地内にかつてあった宇洞ヶ谷横穴は特異な横穴です。死者を葬る玄室の大きさは、奥行き 6.3m、最大幅 4.3m、高さ 2.6mをはかり、その中央には長さ 4.5m、幅3m、床高 0.9mの巨大な棺がつくり出されていました。柄の先に鳳凰の飾りが付いた大刀や銀が多く使われた飾り大刀の他、青銅鏡、装身具、馬具、須恵器など副葬品の数

山麓山横穴の杏葉

堀ノ内 13 号墳の杏葉

は極めて多く豪華で、権力を持った豪族の墓にふさわしい内容です。宇洞ヶ谷横穴の北、同じ丘陵の先端には、6 世紀中葉の山麓山横穴がありました。この横穴も、玄室の長さが 6 m と大きく、副葬品も豪華であり、宇洞ヶ谷横穴に葬られた豪族の先代の墓と考えられます。宇洞ヶ谷横穴の後に続くのは、大きさが南北 25 m、東西 17m の円墳、堀ノ内古墳群 13 号墳です。宇洞ヶ谷横穴のすぐ南の丘陵上に立地する古墳ですが、主体部は細い丸太で断面形を三角形になるように組み、外側を粘土で覆い埋葬する部屋とした、横穴式木芯粘土室と呼ばれるものです。副葬品のうち、杏葉と呼ばれる鉄地金銅貼りの馬の飾りは龍が 2 匹からみあう見事な装飾が施されたものです。これらの墓は、同じ谷に面してつくられており、この谷のことを王家の谷という人もいます。

茶屋辻横穴群全景

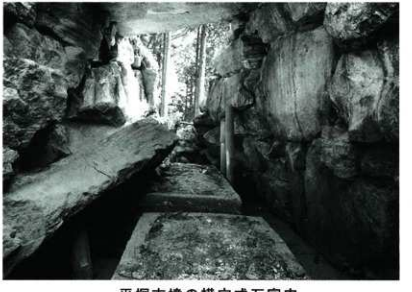
群集する横穴

佐東川に面した中方の丘陵にあった玉体横穴群は９基が調査されています。そのうち、第３号横穴は、横穴群中最も高い位置にあり、多くの土器の他、大刀、青銅鏡など多くの副葬品が出土しています。６世紀中ごろの豪族の墓と考えられます。東名高速道路のすぐ北にあった杉谷の丘陵につくられた茶屋辻横穴群は18基が調査されています。丘陵の東側に17基あり、西側には１基単独で存在していました。このＢ１号墓は他の横穴には見られない複室構造のものです。５号墓からは全国的にも珍しい特殊偏壺と呼ばれる須恵器が出土しています。６世紀中ごろから７世紀にかけてつくられ続けた横穴群です。

横穴式石室を持つ古墳の導入

６世紀後半になると、掛川市でも横穴式石室を採用した古墳がつくられるようになりました。原野谷川を望む本郷の丘陵にある長福寺古墳群１号墳は、横穴式石室を採用した直径17m前後の円墳です。石室は全長9.6m、幅1.5mの長大なもので、金銅装の馬具や装飾のついた大刀など豊富な副葬品を持っていました。原野谷川の上流域を収めた豪族の墓と考えられます。

上西郷の倉真川沿いの独立丘陵上には平塚古墳があります。玄室長5.25m、幅1.8mの横穴式石室の中には、組み合わせ式の石棺が２基置かれています。昭和31年に当時の三笠村が石室の調査を行い、大刀、須恵器、装身具などが発見されました。この古墳は円墳といわれていましたが、平成９年度に掛川市が調査を行った結果、一辺20～25mの方墳である可能性があります。方墳は古墳時代の終末期といわれる７世紀には、前方後円墳に代わり天皇陵に採用された墳形です。



平塚古墳の横穴式石室内

古墳づくりの終わり（７世紀）

古墳時代の終わりころの古墳

小笠山から北に突き出した平野の丘陵上にあった居村古墳群は、小笠山総合運動公園建設に伴い調査されました。横穴式石室の古墳が３基あり、副葬品として大刀、装身具、土器などが見つかっています。つくられたのは、７世紀中ごろと考えられます。

県立横須賀高等学校内にあった愛宕山横穴群は、4基からなる横穴群です。副葬品は、須恵器、鉄鏃、耳飾りなどが発見されています。須恵器のうち、副葬品専用と考えられる全国的にも珍しい3つの足が付いた三足壺がありました。この地域では7世紀に須恵器の生産が始まりましたが、それを任された役人の墓であるかもしれません。

横穴は6世紀代から7世紀にかけて継続的につくられ、本郷の楠ヶ谷横穴群や下垂木の飛鳥横穴群、中の毛森山横穴群のように数十基単位の規模の大きな横穴群もあります。

しかし、これほどまでに群集した横穴は7世紀中ごろ以降は新たにつくられることは少なくなりました。追葬は奈良時代初頭まで続けられましたが、それ以降は横穴による墓制は廃れてしまいました。

愛宕山横穴群出土三足壺

開発予定地内に遺跡はありませんか？
工事の計画前に確認してください。

掛川市内には現在704遺跡が確認されていて、県内でいちばん遺跡が多い市だといわれています。遺跡（埋蔵文化財）は、私たちの”心のふるさと”であり、後生の人たちに伝えていく大切なものです。

そのため、「文化財保護法」により、遺跡がある場所で、土木工事や建築工事、茶園の改植などを行う場合には、事前に文化庁へ届け出をすることが義務づけられています。

届け出をしないで工事を始めたところ、遺跡が見つかったため調査をすることになり完成が遅れてしまった・・・・ということがないように、工事を計画する場合には、早めに教育委員会にご相談ください。

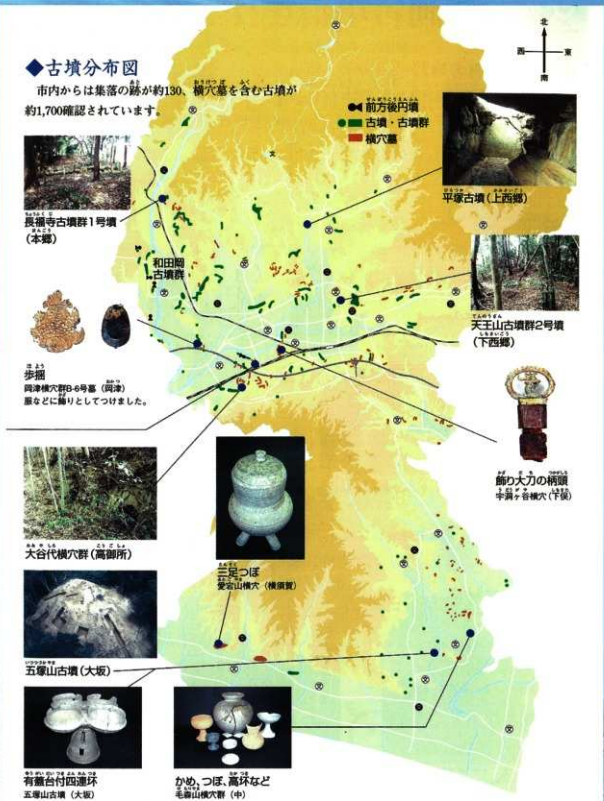
なお、教育委員会、図書館には、市内にある遺跡の位置を記した『遺跡地図』があります。静岡県教育委員会文化課のホームページでも遺跡地図は公開されています。工事を計画する前には必ず確認してください。

掛川市教育委員会　社会教育課　文化財係

電話（0537）21－1158

◆古墳分布図

市内からは集落の跡が約130、横穴墓を含む古墳が約1,700確認されています。



出典『新・わたしたちの掛川市【歴史編】』